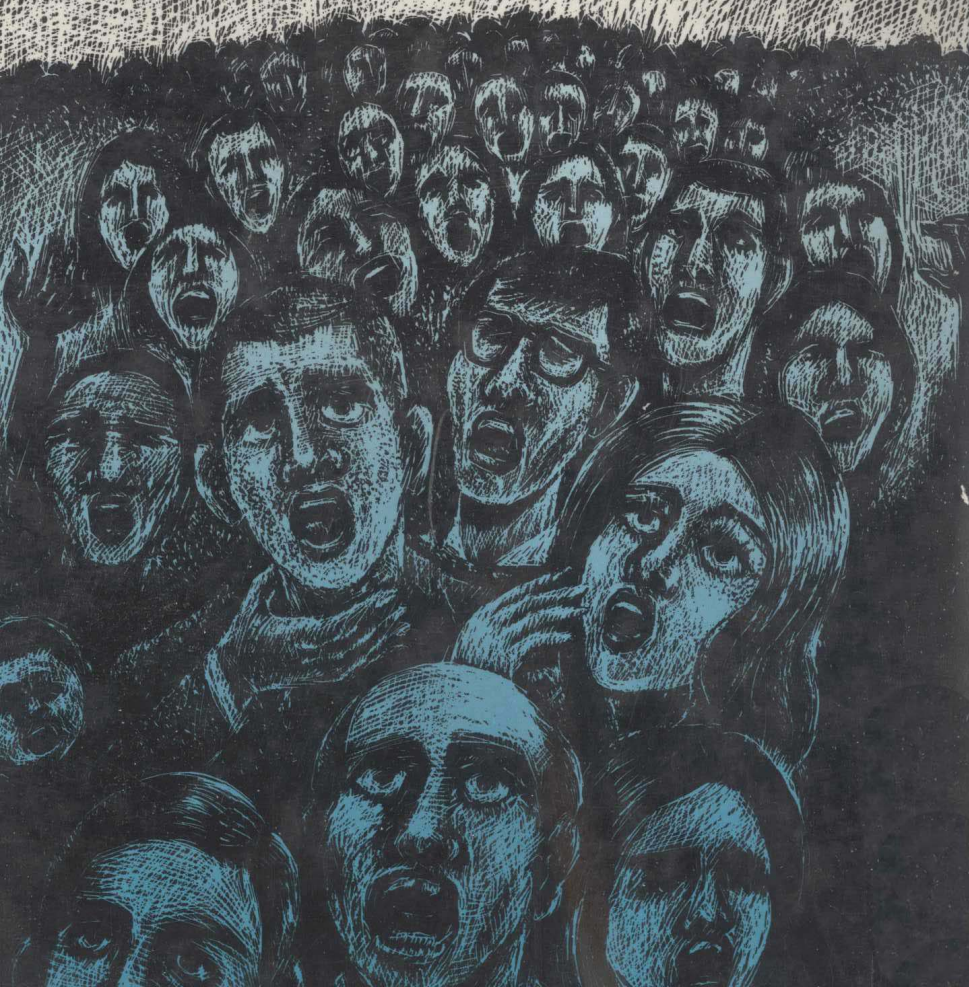
乾燥死街

佐賀斎



乾燥死街

佐賀 蒼

ダイヤモンド社

著者略歴

佐賀　蒼（さが　そう）

1918年東京生れ。本名松下紀久雄。推理作家佐賀潜は実兄。太平洋画学校卒。芸術家集団ベラの会会長。朝日新聞に連載した「東京むかしむかし」の古代史を日本で最初にイラスト化し，千葉市立加曾利貝塚博物館に長さ80mの壁画がある。Do it yourself 関係の著書多数あり，手づくり創作家。今後は推理作家佐賀蒼としてスタートする。

乾燥死街

昭和53年4月6日　初版発行

著者　佐賀　蒼

© 1978 So Saga

発行所　ダイヤモンド社

郵便番号　100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集 電話 東京 (504) 6403
販売 電話 東京 (504) 6517
振替口座 東京 9-25976

落丁・乱丁本はお取替えいたします

亨有堂印刷・中西製本

0393-070150-4405

乾燥死街

装丁　宮本　忠
レタリング　川崎　勇
カット　松下紀久雄
（ペラの会）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

1　消えた患者

きびしい大寒冬に突入し、日本付近の上層偏西風が強まった関東地区に、誰もまだその正体を知らない、まったく抗原構造の異なる、ウイルスH4型が直撃しようとしている。

その運び屋が、羽田国際空港に降りた。コペンハーゲンからモスクワを経て、ウラル山脈の上をジェット気流に乗り、シベリアから東京国際空港に到着したスカンジナビア航空の、ジャンボ機の中にいた。

スピーカーから、金属的な音にすり変ったスチュワーデスの声が流れてくる。人々は無事到着という安堵感からか、何やらほっとした、声とも吐息ともつかない音が機内に拡がった。

ノースモーキングのサインも消え、しばらく消えないままでいた座席ベルト着用のサインも消え、乗客は呑みかけのスコッチをバッグにねじ込む。立ち上って頭上のロッカーからコートを引きずり出

す。早い人は手荷物を下げ、ドアに向かう。流れていた音楽が、乗客の私語で掻き消されてしまった。

狭い通路には、乗客の列と手荷物がぎっしり詰まっている。その中ほどに、それこそ意気消沈した中神次郎がいた。

黒いベレエの中から、滲み出る汗が頬をつたい、首すじからマフラーに流れている。鈍く、油で光った髯面が痛々しく見える。

寝て、食べて、飲むだけだった長い機内の生活から、やっと解放された、喜びに満ちた降客の足どりとは逆に、中神次郎は座席の背もたれを摑みながら進んでゆく。

やがて、開放されたドアに辿りつく。明るい朝の空港に、各国の旅客機が翼を休めている。強い、冷たい風が機内に吹き抜けてくる。送迎バスに、乗客が乗り始めた。

中神次郎は、一歩一歩、踏みしめるように、タラップを降りてゆく。シベリア貂のコートを着た女の後ろを、やっとの思いで降りてゆく。降り切るとそこにバスが待っていた。

中神次郎は、ステップと同じ、低い床になったバスの窓際にやっと座った。

バスは、まるで畑の真中に降りたような、広いアスファルトの上をしばらく走り、停止しているルフトハンザ機の翼すれすれに右折し、ターミナルビルの通路に止まった。

中神次郎は変哲もない長い廊下を、重々しい足どりで歩いていった。「右折」や「左折」の指示看板をたよりに、精根を出しつくして歩くように見える。ときには壁によろめくこともあった。

吐き出されるトランクや梱包が、渦のように円型コンベアに流れ出す。搭載荷物の受渡しが始まっ

ていた。

黄、赤、ベージュ、茶、白、青などの、色とりどりのパッケージがぐるぐる回る。普通でも、そこから自分の荷物を探し出すのは、容易なことではないのに、中神次郎は、いく度か手を差し出して、自分の荷物を逃がした末、やっと青いトランクを床にすべり落とした。そのトランクにはキャスターがついていた。

税関のチェックは夢うつつ、ただ、人々の流れの中に、押し出されるようにロビイへと出ていった。

中神次郎は、それから二時間後に、救急車で浜松町にある、中央臨床ホスピタルのベッドに寝かされていた。空港ビルのレストラン「ミツモト」の椅子に、ぐったりとして倒れるように机にもたれたのを、空港警備員に発見されたからである。

インフルエンザによる急性気道感染症と診断さ

れた。顔面は紅潮し、体温三十九度Cから四十度C。インフルエンザの合併症で、声帯のある声門下組織が肥大し、咳はまるで犬が吠えたように声枯れがおき、会話は不可能の状態におちいっていた。
「ひどいウイルスを持ち込んだもんだ。いま研究室に採血と咽頭ぬぐい液を検査中だから、いずれA型かB型かが判明するさ。研究室じゃ、あまり見かけないやつだといっていましたぜ。大変なお客さんだよ、あれは」
佐宗医師は白衣のポケットからホープを一本引き抜いた。
「患者は、パスポートでは、世田谷区祖師谷に住む中神次郎三十三歳ということなんだが、その住所に問い合わせても、該当者は四年前に引越したままで、近所には知合いもいねえんですから……」
小比木事務主任は、むくれたような表情をしてみせた。
「パスポートでは、一月三十日に出国し、ヨーロッパからモスクワに入ったのが二月九日。あとは二月十三日にノースウエスト機に乗り、十四日に北回りで羽田に着いています」
「まったく、今日まで一言もしゃべらないんだから弱っちまう。所持金は？」
「八百ドルと、日本円が十六万。あとはフランとマルクが少々ですね。ま、持ってるほうですよ、あの身なりにしちゃ」
「私が食事を持っていくと、軽く頭だけは動かすふりはするのよ。何か話しかけても、ぼんやりと私の顔を見るだけなの」
これは、三十八号室を担当する、看護婦の末川つゆ子であった。

「とにかく、院長先生も、このインフルエンザには神経を使っているんだから、二、三日個室に入れて様子を見ましょう」
佐宗医師はそう言うと事務室を出ていった。その背中に、
「さきほど、国際予防衛生研究所へは電話をしておきましたよ」
と、小比木事務主任がいった。佐宗医師は後ろ向きのまま右手を少し上げ、ドアを押して出ていった。

その夜、中神次郎の姿は、中央臨床ホスピタルのベッドから消えていた。発見者は末川つゆ子であった。末川つゆ子は当直の佐宗医師の前で、小柄な体をふるわせて、失踪した状況を、こう説明している。
「朝の五時三十分でした。ドアを押すと、部屋の電気が消えていました。私はすぐ入口のスイッチを押して点灯したわけですが、ベッドは、まるで人間が寝ているようにふくらみ、スリッパもベッドの下に揃えてありました。部屋の隅に置いてあった青いトランクがないので、はっと気がついたわけです。ベッドの中には、長椅子の上にあったクッションが二つ入れてあるんです」
「それで、どこから出ていったのかね」
「解らないんです。窓は締まっていました。カーテンもです。あとは、宿直室の前を通り、ガードマンのいる通用口しか出るところはないはずです」

「それが、通用口には私と木倉がいましたし、あそこを出た気配はありませんです。ほんとに」
ガードマンの平野進吉がいった。
「入院したその夜に逃げ出すなんて……。何か逃亡しなければならない理由が、あの患者にあったのだろうか？」
「それにしても、あんな大きなトランクを下げて、いくら熱が下ったとはいえ、それでも三十八度Cもある体なのに……」
看護婦の末川つゆ子は、細い眉毛を八の字に寄せている。
「変な野郎だな。とにかく警察には届けておこう。心配なのは、ウイルスを街にばらまかれることだ。できれば捕まえたい」
「でも、コレラやチフスとは違いますから。でも心配だわ」
「貴重品とパスポートは預かっているんだろうね？」
「いえ、それが……。夕食を片付けようと三十八号室に入ったら、両手の親指と人差指で四角く形をつくるんで、なんですかと聞いたんです。そしたら、かすれた声で『パスポート』というんです」
「そして、そいつを渡したのか」
「そうなんです。事務主任と相談して。どうせ、いずれは返すものだからと、ロッカーから出して……」
「返したのか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ええ、患者さんに渡してあげました」
「しまったな。ヘマをやったよ」
佐宗医師は腕組みをし、床に視線を落とした。

患者の配膳をすませ、職員の朝食が始まった八時頃、港警察から二人の刑事がやってきた。叶刑事と市倉刑事である。
一応の現場検証を済ませ、中神次郎の住所などをカルテから書きうつし、叶刑事が佐宗医師の肩を軽く叩いて、
「あれを見て下さい。通用口の警備員は、あの窓から覗いているんでしょう？　窓の高さが一メートルもある。その男は犬のように這ってゆけば、ガードマンに発見されずに済みます。しかもですよ、廊下にはカーペットが敷きつめてあります。トランクを押したり、引っ張って歩いても音はしないしね」
と、小声でいった。
「しかも、その時間には、ガードマンは居眠りしていることも多いし……」
そういうと、二人の刑事は待たしてあったセドリックに乗り、帰っていった。
「不思議な男ねえ、まったく」

内科の医務室に、鳥居政代副院長が座っている。その前に、昨夜の出来ごとを報告し終わった、佐宗医師がうなだれている。

「まことに、申し訳ございません」

「仕方がないじゃない。そのために警備員を配置しているのに、その穴を抜け出すんだから……。私から院長先生に報告しとくわ」

この副院長は、日本歯科医大の内科主任を勤め、この臨床ホスピタルには、月水金だけの勤務であった。

日曜日の診断は半日で、廊下は外来患者で埋まっている。スピーカーで、診断受付順の、五、六人の名前が呼び出されていた。

2　国際予防衛生研究所

目黒駅からほど近い国際予防衛生研究所は、広い前庭を配した、グレイ一色の古びた建物であった。タラバガニが足を拡げたように、中央に三角型の突き出た部分があり、足の部分は小さな窓が並ぶ三階建て、二階建てが拡がってゆく。

この建物の右裾に通用口がある。そこを抜けたところに、ペンキで「インフルエンザ」と書かれた、職員が書いたらしい板切れが立ててある。

建物はブロック建ての平家の洋館。一見クリーニング屋の洗濯工場といった格好だ。あたりは、空箱やビニール袋に包んだゴミの山。鶏卵を入れるダンボール箱が積んである。

一枚ドアを引けば、そこはボイラーと、ステンレス張りの自動孵卵機が並ぶ。ゴム長をはいた職員が、濡れたコンクリートの叩きに立って、卵の一つ一つに注射針を突っ込み、ウイルスの培養作業に忙しい。

その奥の研究室では、主任の山内高尾博士が、ばらばらなロマンスグレーの髪を、手の平を櫛がわりになでつけながら、若い研究員と、研究会議とも雑談ともつかない会話を交わしている。

「まったく、こいつは、まずいことになったよ。シベリアかぜを持ち込んだ患者が、臨床ホスピタルから消えたって事件さ」

「どのくらいのスピードで、この街に流行してゆくか、やっぱり心配ですねえ」

揉上げを頬までのばした、市川順也がいった。

「とにかく、H4がお出なすったんだからな。こいつは忙しくなりやがったよ」

山内主任は、冷めたインスタント・コーヒーをすすった。

「何しろ、この二月、三月には、どんな株が（ウイルスの）きたってお手あげなのに、H4がやってきたんですから」

「このH4が、どんな暴れん坊なのか、世界中の関係者は知っちゃいない。とにかく、これがA型だということが恐いんだよ」

A型は、一九三三年にSmith Andrewes氏らによって、インフルエンザ・ウイルス（A型）が分離され、ウイルス病原説を世界中が知ることになった。

ウイルスが寒さに耐える力は、摂氏四度で一週間、マイナス摂氏七十六度で数ヵ月の活性が保持されることが解っている。熱さには弱く、摂氏五十六度では数分間で感染力を失うのだ。

地球上に動物がいる限り、このウイルスは変身を重ねながら生き続けてきたのだろうか。いや、そうではない。ウイルスは人間社会が生んだ異種病原体なのだ。

地球はまだ自然のままの姿で、山には火山が爆発し、沃土には植物が繁茂していた。地上に棲む動物は、この満ち足りた世界に、自然の循環作用をくりかえしつつ、共存してきたのだ。

その地球を、人間のための本能社会が汚染していった。地下から水を汲み上げ、あらゆる地下資源を浪費し、そのあげくが空気汚染に拡がってゆく。

地上は、還元性のまったくないコンクリートで包まれ、満ち満ちた人類によって、住まいは高層化をたどり、自然は急速に失われていった。

ために、異常気象が発生し、冬には雪の降った街が、冬の来ない街に変身してゆく。気温の変動がおこり、湿度の低い毎日が続く。そこに、インフルエンザ・ウイルスが誕生する。天罰覿面（てんばつてきめん）という古い言葉がある。天にツバを吐き、それが自分の面に落ちてくるという意味だ。

もう少し、インフルエンザ・ウイルスのルーツを探る必要がある。それは、この小説が、やがて恐怖の世界に結びつくことを理解して貰うために、ウイルスという旅行者が、どんな姿で世界を歩き回

ったか。そのアシの裏づけをとる必要があるからだ。

一九四九年には、Francis Magill 氏が、A型ウイルスとはまったく抗原構造の異なるB型インフルエンザ・ウイルスを発見している。

このB型女史は、ごく限られた地域にばらばらっとかぜを流行らせる、気まぐれな旅行者である。その土地から消えていくときには、行く先を誰にも告げずに、ひょこひょこと旅に出る。飽きっぽい貴婦人のように。

そこへゆくとA型野郎は違う。ウイルスのB嬢を追いかけるがごとく、たどり着いた土地はもちろんのこと、それからそれへと旅を続け、世界中に悪性のウイルスを、メチャメチャにまき散らす。

一九四九年、Taylor 氏によって、A型やB型とは異なる株が分離され、これはC型と命名された。A型もB型も、そのインフルエンザ・ウイルスは、抗原変異をおこしやすいことが発見された。特にA型にいたってはそれが著しく、一九四六年のA1型はA2型に変身し、一九五七年に再度の大きな抗原変異株となってやってきた。それが汎流行の原因となったアジアかぜと香港かぜである。

つまり、Aというオジさんが、色も異なったスーツケースを下げ、毛皮の襟のオーバーではなく、バーバリーコートなんかを着込み、ダンディな姿に変身してやってきたのだ。

インフルエンザ・ウイルスが、ひとたび人体に感染し、それが何らかの方法で外へ出るときは、同じパスポートを持った、別のA型に変っているのである。

このA型野郎は、一八八九年から九〇年にかけてスペインかぜとしてやってきた。それがなんで味

をしめたか、一九一八年にやってきて、四九年まで暴れ回って帰っていった。これが、今世紀のインフルエンザの始まりである。

一九四七年から四九年にやってきたイタリアかぜは、A型のH1N1という流行服を着込んでやってきた。これが全ヨーロッパを掻き回し、死者を続出させている。

次は、きっちりと十年後にアジアかぜとなり、A野郎はH2N2という、しゃれた名前でやってくる。組立て式の軽機関銃をトランクに忍ばせた、それは凶悪な殺し屋であった。

アジアかぜが納まった一九五八年から十年目、一九六八年にA型野郎は、忘れずに香港からジャンボ機でやってきた。名前はH3N2であった。

「だから、十年目の周期説をとれば、A型がやってくるのは今年と来年の間だということになるんだ」

山内高尾博士は、机に並べてある採血管に視点を止めた。今朝、世田谷区医師会から送られた、区内の学童から集めたものと、同じ区内の老人から集まった採血管が、針金で編んだ収納篭に並んでいる。このワインのような採血から、インフルエンザ・ウイルスの免疫度を調べるためである。

「その周期についてですが、先生は、周期はことによると循環するかも、とおっしゃった。つまり、十年の間隔で丸い輪になって、過去のウイルスがやってくる……」

「そうなんだ。この周期が輪になるのか、あるいは一本の棒状になるのかが最大の疑問だった」

「その通りです、先生」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com